富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Human Development, University of Toyama

第46号
（2026年3月23日発行）

ある冬の日の事務：実践センターを支えていただいて

センターニュース第46号　目次

02　巻 頭 言……学 部 長　片岡　弘
03　挨　　拶……センター長　高橋　満彦
04　報　　告……客員教授　舟杉　克巳
　　客員教授　宝田　幸嗣
06　学園通信　附属幼稚園／附属小学校／附属中学校／附属特別支援学校
08　活動報告　学習環境研究部門
　　教育臨床研究部門
　　教育工学研究部門
　　環境教育部門
10　報　　告　内地留学を経験して
11　報　　告　第107回国立大学教育実践研究関連センター協議会
12　業務報告　センター日誌
　　編集後記

巻頭言

実践総合センターへの期待

教育学部長　片　岡　　弘

富山大学教育学部と金沢大学学校教育学類との共同教員養成課程はこの３月に初めての卒業生を送り出します。これもひとえに、教育研究実践総合センターをはじめ、共同教員養成課程に携わる皆様のご尽力の賜物です。心より御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

さて、私たちを取り巻く世界は、これまでの「ルール」に基づく秩序から、「ディール」に象徴される駆け引きや利害調整が、より目に見える形で表れる、先の見通しにくい時代へと移りつつあるようです。不確実性が高まるなかで、未来を生きる人を育てる教育の重要性は、これまで以上に大きくなっています。

教育を取り巻く環境もまた、絶えず変化し続けています。生成ＡＩの急速な発展はその一例ですが、大学入学共通テストに相当する問題で高得点を出したことや、長く未解決であった数学の難問の証明に成功したといった話題に触れるたびに、期待と同時に、少なからぬ戸惑いを覚えてしまいます。

一方で、ＡＩが人間よりも優れた能力を発揮する場面が増えても、人の関心が必ずしも失われるわけではありません。たとえば将棋や囲碁の世界では、人間がＡＩに勝つことは難しくなりましたが、今もなお、人間同士の対局は多くの人に親しまれています。視聴者はＡＩによる形勢判断を参考にしながらも、対局者の思考や決断の過程に引き込まれ、観戦を楽しんでいます。

そこには、考え、迷いながら決断し、その結果を引き受けていく人間の姿に対する共感があるように思われます。私たちは、最善の一手だけでなく、そこに至るまでの試行錯誤や葛藤の過程に心を動かされるのです。

このような構図は、教育にも通じるものがあるように思えます。たとえば理科の実験において、公式を用いた計算や、実験結果を整理して結論を導くことは、ＡＩが得意とする領域です。しかし、不思議な現象に驚き、「なぜこうなるのだろう」「どのような説明が考えられるだろうか」と仮説を生み出していく営みは、現時点では人間に固有のものだともいわれます。こうした妥当な仮説を生み出す推論、いわゆるアブダクションは、様々な分野における創造的思考の出発点であり、生成AI時代の学びにおいて、いっそう重要になるとの指摘もあります。

こうした変化は、教員養成にも新たな課題と可能性をもたらしています。これからの教員に求められるのは、知識や答えを分かりやすく伝えることだけではありません。子どもたちの考えが生まれ、揺れ、時に誤りながら深まっていく過程に寄り添い、丁寧に支えていくことが求められています。すぐに正解を示すのではなく、「そう考えたのはなぜだろう」と問いかけ、考え続ける時間を大切にすることが、学びを支える専門性につながっていくのではないでしょうか。

教育研究実践総合センターは、そのような多様な学びの姿を、学校現場の皆様とともに考え、共有していく場です。考え、迷い、判断し続けるという人間の営みを大切にしながら、教育実践と教員養成が結びつき、より豊かなものとなっていくことを心より期待しています。

挨　拶

実践センターの使命

教育研究実践総合センター長　高　橋　満　彦

センターという組織資源を120％活用して「教育の諸課題に係る研究及び実践」を推進する所存だと昨年のセンターニュースに書いてから一年が経過しました。なかなか意気込んだように事を進められたとは言えませんが、それなりの成果も課題も見えてまいりました。

やはり昨年のニュースに書いたように、センターのレゾンデートルをどこに見出すのか難しいところはありますが、学部のルーティン業務では手が届きにくい実践教育的研究の推進が当センターの当面の役割だという見込みは外れてはいないようです。特に各部門の一年間の活動を見ておりますと、学外の教育関係実務者を交えた研究会やセミナーなどのイベントがセンター教員によって開催されております。開催形態こそ様々ですが、センター教員が富山県の教育界や社会一般に有益な影響を与えていることが実感されます。来年はこれらのイベントをセンターとして支援していきたいと考えております。

また、７年度はセンター紀要の見直しをしました。具体的には、令和になってから査読制になっている紀要ですが、より自由度のある原稿の掲載と編集資源の適正な配分のために、原稿種別を見直して、査読を経ない原稿種別も設けました。一方で、著者の原稿作成で準拠すべきスタイルガイドを提示しました。センターでは、原稿投稿者を実務者に拡げる方針を取っていますが、学術原稿の執筆に慣れていない実務家の方も、スタイルガイドにより、安心して投稿していただけるようになったと思います。

共同教員養成課程の初めての卒業生も輩出され、「完成」を迎え、やっと落ち着きも見えながらも課題も顕かになってきました。そのなかで、センターはどうあるべきでしょうか。共同教員養成課程が「完成」しても、センターは完成しません。各部門の取組、附属学校園との共同研究、実務者著者も交えた紀要の編集発行、セミナーや研究会などの開催などを通じて、「教育の諸課題に係る研究及び実践」の推進に、今後も邁進して参ります。

報　告

学校と大学のコラボレーション「教育フォーラム2025」
「これからの学校教育のかたちと学びのすがたを探る」

センター客員教授　舟　杉　克　巳

11月29日に、10回目を迎える「教育フォーラム2025」を開催しました。これは、学校と大学が連携して、教育実践と教育研究の融合を図るとともに、教師と研究者による協同の学びを推進する目的で、年に一回開催しています。

今年は、子ども一人ひとりの個性を尊重しながら自立と共生を学ぶオルタナティブル教育を取り入れた学校の教育実践をもとに、教育とは誰のために、何のためにあるのかを考えながら、これからの学校教育のかたちや子どもたちの学びのすがた、授業の在り方について、グループ協議も含めながら考えを深めていきました。

オンライン参加も含めて、50名の先生方、学生、教職大学院生、大学教員、教育機関等の方々の参加で、様々な立場から「学校の未来とこれからの学び」について学び合い話し合いながら考える機会となりました。

〈主な内容〉

1　講　　演　「妙高型イエナプラン・新井南小学校の実践」
妙高市教育委員会　指導主事　陸川　昌克　先生
妙高市立新井南小学校　校長　丸山　文雄　先生

2　実践発表①　「通信制高校・青池学園ＡＯＩＫＥ高等学院」
青池学園ＡＯＩＫＥ高等学院南砺福光キャンパス長　吉田　英文　先生

実践発表②　「オルタナティブスクール『自由学舎EUREKA』」
自由学舎EUREKA　代表　永谷　真弓　先生

3　グループ協議　「これからの学校教育のかたちや子どもたちの学びのすがた」

〈参加者の感想の一部〉

- 富山市の教育の一つにイエナ的教育の導入があり、新井南小学校の取組みを興味深く聞くことができた。丸山校長先生には「みんなが幸せなる」学校の具体的な姿をたくさん教えていただいた。また、自由進度学習のデメリットも感じていた私にとって、直接質問も出来てよかった。今回参加したことで、「職員一人ひとりのやりたいことを実現できる学校」とは、素敵だと思った。
- 今回のフォーラムに参加して、現代の教育の形が大きく変わってきており、大きな変革期に来ていると感じた。全日制に通えるから良い悪いということではなく、個人に合う多様な学びの場の提供が進んでいると感じた。オルタナティブルが多くなってきている中、公立学校に出来ることは何なのかを考えさせられることが多かった。
- 今回公立学校、通信制高等学校、オルタナティブルスクールの実践例を知ることができて、とても有意義な時間だった。公教育として、今改めて、何を大切にしたらよいかが、子どもたちの幸せのため教育がどんな役目を果たせるか考える機会となった。

今、社会は多様化し、変化が激しく複雑化し、将来の予測が困難な時代を迎えています。このような時代を乗り切るためには、これまでの画一的な一斉授業や成績重視の評価だけでなく、子ども一人ひとりの個性や主体性を尊重する教育へと転換していく必要があります。しかし、現実には受験優先の社会構造が依然としてあり、個別教育の進展を阻んでいるように思います。それを改革し、国を支える子ども一人ひとりのための教育が行われるように教育行政の本気の改革が今後望まれます。

今年も、発表者の熱意や参加者の積極的なグループ協議などで充実した研修会になりました。閉会後も多くの参加者が残って話し合いをしている姿がとても印象的でした。

報　告

仲間との交流を通して学び合う

センター客員教授　宝　田　幸　嗣

内地留学は、教育臨床に関わる理論や手法を学ぶことによって専門性を高めたり、視野を広げたりするだけでなく、心身をリフレッシュして、気持ちも新たに児童生徒と向き合うきっかけにもなります。担当する授業（水曜日の午後、前期・後期各18回）では、仲間との交流を通して心理解放を促進し、関係性を深めます。また、学んだことが日々の実践につながるよう、体験を通した学び合いや振り返りを大切にして、その有用性を実感できるように配慮しています。

今年度は、前期５名（小学校１、中学校３、高校１）、後期４名（小学校３、中学校１）の方に受講していただきました。

授業は、次のような内容で構成しています。

１　ウォーミングアップ

授業の冒頭部分は、プレイルーム内にある遊具で遊んだり、卓球をしたりして仲間と交流します。楽しい時間を共有する中で、関係性の深まりを実感し、心を開いて活動に取り組めるようになることをねらいとしています。また、研修期間後半には、安心できる関係性の中で箱庭による心の風景の表現を体験します。

２　学外研修

学外の施設でグランドゴルフ等の軽スポーツに興じたり、陶芸に没頭したりする機会を持ちます。教員としての役割を外し、普段とは違う環境で仲間と交流したり、自分自身と向き合ったりすることを通して、他者理解と自己理解を深めます。

３　人間関係づくりの手法

構成的グループ・エンカウンターやグループワーク・トレーニング、ソーシャルスキル・トレーニング等、児童生徒の人間関係づくりの手法を仲間との演習を通して体験的に学びます。学校で活用することを想定して、効果的な実施時期や場面、求められる工夫や配慮等について話し合います。

４　学校における教育相談の進め方

面接・面談の進め方やカウンセリングの技法等について学んだ後、研修生が過去に経験したケース等のロールプレイを通して、児童生徒や保護者との面接、及び同僚へのコンサルテーションの在り方についてその留意点を話し合います。

５　気になる児童生徒への対応

不登校やいじめ等の現状を踏まえ、求められる指導・支援の在り方について意見交換します。また、発達障害等の気になる児童生徒について、研修生が過去に関わったケース等を基に理解を深め、効果的な支援の在り方を話し合います。

ザリガニ大漁！（呉羽青少年自然の家）

芝生の広場でモルック（とやま健康パーク）

学園通信

附属幼稚園から

附属幼稚園　陽　弥生

本園では昨年度より、研究主題「主体的な子供の活動を支える教師の役割」を掲げ、研究を進めています。昨年度は、保育者が子供の姿を見取ることに焦点を当て、二年次である今年度は、その見取りを生かした援助ができるようになりたいという思いから、副題を「援助の質を高める」とし、保育者の援助に焦点を当てました。

研究を進めるにあたり、保育について語り合う保育カンファレンスを大切にしています。今年度は保育者の話題にしたい場面や保育者自身の課題等を取り上げ、保育カンファレンスを行いました。援助の根拠とした子供の姿から保育者は何を捉えたか、それに対して保育者はどのような意図で援助を行ったかを明らかにし、その援助がどんな子供の活動につながったかを語り合いました。「この子にはこんな思いがあったのでは？」「このような援助もよいのでは？」と、参加者それぞれが自分だったらどのような援助をするかの視点で意見を出し合いました。それによって、多様な支援が可能であることが分かっただけでなく、たくさんの考え方や知恵、経験をもとにした援助を共有することができました。そして、もっと子供の思いや願いを理解したい、それに届く援助をしたいと強く思いました。

これからも保育者間で語り合う場を大切にするとともに、子供の活動よりよい援助につながる継続可能な保育カンファレンスの在り方を考えていきます。今後も附属幼稚園の研究にご指導とご協力をお願いいたします。

附属小学校から

附属小学校　齊藤　嵩之

本校では今年度より、新たに「他者とともに編む」を研究主題に掲げました。

「他者とともに編む」とは、子供の学びを、どのような経験や出来事が重なり、何がどのように編まれていったのか、その生成のプロセスを丁寧に見取ろうとする研究です。さらに、学びが編まれていく過程において、他者の存在は常に重要なきっかけになると捉え、「他者とともに」を大切なキーワードとしました。編み物は途中で失敗しても一度ほどき、再び編み直すことができます。この喩えを通して私たちが伝えたいのは、学びは一つの正解や一つの道筋に収束するものではなく、様々な在り方があってよいということです。効率や合理性ばかりを前に出すのではなく、失敗や回り道も学びの一部として受け止めながら、プロセスそのものに価値を見出すことを、私たちは提案したいと考えています。

本研究では、研究の方法として「仮説生成型研究」を重視しています。実践の中から仮説を生み出し、実践と省察を往還しながら、新たな言葉と理論を立ち上げていく研究です。自分たちの実践から、自分たち自身の理論をつくり出そうとする営みでもあります。今いるメンバーを生かして研究を創ろうとする姿勢は、どの学校においても可能であると私たちは考えています。その信念のもと、実践と研究を積み重ねていきます。

今年度は副題を「様相を探る」とし、子供たちの関わりや内面の働きに着目した授業実践を行ってきました。また、研究発表会は土曜日開催とし、県内外から多くの参観者を迎えることができました。

今後とも附属小学校の研究に、変わらぬご指導とご協力をよろしくお願いいたします。

附属中学校から

附属中学校　早川　晃央

本校では研究主題「主体性の高まりをめざす課題学習」の下、今年度から新たに、「学びの往来を通して、『自立した学習者』を育成する」を副題に掲げ、以下の３点を中心に研究を進めました。

①附属中学校がめざす「自立した学習者」はどのような姿か。

②「自立した学習者」を育成するための学びの往来は、どうあるべきか。

③「自立した学習者」の育成に必要な自己調整学習におけるメタ認知とはどのようなものか。

今年度６月まで行っていた前副題「『見方・考え方』を働かせ、『深い学び』を実現する授業づくり」では、教師の考える「深い学び」と生徒の考える「深い学び」にずれがあるのではないかということが課題として残りました。そこで、今年度からは、生徒を巻き込んだ研究に取り組んでいます。初めて研究部全校集会を開催し、研究の趣旨を説明するとともに、生徒に「自立した学習者」とはどのような姿か、また、その姿に近付くためにどのような力が必要か、アンケートを行いました。全校生徒の回答をもとに、各学年の生徒を交えて、座談会を開き、教師・生徒それぞれが理想とする「自立した学習者」像を掲げました。次年度以降、教師・生徒の考えを統合し、本校がめざすべき「自立した学習者」像を定め、日々の授業実践を重ねようと考えています。

来年度の教育研究協議会（６月５日）では、今年度同様、生徒を交えて、研究の成果を発表したいと考えています。また、講師に京都大学教育学部准教授 奥村好美 先生をお招きして講演を予定しております。多くの先生方のご参会・ご指導をいただきたいと思います。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校　熊南　真人

本校では、研究主題を「ウェルビーイングを実現する学校づくり」と設定し、３年計画で研究を進めています。文部科学省は、令和５年に閣議決定された教育振興基本計画の中で、二つのコンセプトを提示し、日本発日本社会に根差したウェルビーイングの向上が明記され、ウェルビーイングはこれからの社会を生きる児童生徒や教師にとって重要なキーワードとなっています。２年次の今年度は、副題を「子どもたちのウェルビーイングを実現していくための授業づくり」と設定し、教育振興基本計画で示された教育政策の16の目標のうち、目標１「確かな学力の育成、幅広い知識と教養・専門的能力・職業実践力の育成」、目標２「豊かな心の育成」、目標６「主体的に社会の形成に参画する態度の育成・規範意識の醸成」、目標９「学校・家庭・地域の連携・協働の推進による地域の教育力の向上」の四つを選び、ウェルビーイングの実現を目指した授業づくりを進めてきました。

授業づくりでは、「子どもを中心に置いたウェルビーイングな授業づくり」を目指し、ゴールデンサークル理論と自己決定理論を参考にしました。ゴールデンサークル理論では、子どもの夢や希望を出発点とした単元計画を作成し、自己決定理論では、子どもたちが主体的に学習に取り組めるように、自律性、有能性、関係性の心理的欲求を充足できるよう支援の方法を工夫しました。

今年度の研究成果は、12月の公開教育研究会にてポスター発表と公開授業を実施しました。県内外から約60名の参加がありました。

来年度は３年次として、更なる研究実践を進め、公開教育研究会で発表させていただきます。今後とも附属特別支援学校の研究にご指導とご協力をお願いします。

活動報告

学習環境研究部門

センター教授　長谷川　春生

学習環境研究部門では、本年度も、富山大学ＩＣＴ・ＤＳ教育支援事業の１つであるオンラインセミナーの運営を行いました。第１回目は、６月25日（水）に、桐蔭学園中等教育学校専任教諭・探究科主任の郡司直孝氏より、「自分と社会のウェルビーイングを追求する『市民』」を育む探究、というテーマで講演をしていただきました。第２回目は、12月３日（水）に、東京学芸大学附属小金井小学校教諭の鈴木秀樹氏より、小学校段階での生成ＡＩ活用の在り方、というテーマで講演をしていただきました。第３回目は、２月18日（水）に、上越教育大学大学院学校教育研究科教授・学長補佐の榊原範久氏より、生成ＡＩ×校務～教員の働き方はどう変わるのか～、というテーマで講演をしていただきました。どの回も16：00～16：45という短い時間で重要なポイントを解説していただきました。大変分かりやすい内容で、大きな学びがありました。また、参加申込者に対しては、YouTube限定公開による見逃し配信も実施し、たくさんの方々から視聴していただくことができました。

また、本事業での新たな取組として、12月13日（土）に、「第１回中学校情報・技術科に向けた研修会」を開催しました。この研修会の運営も行いました。文部科学省中央教育審議会では、中学校技術・家庭科を、家庭科と情報・技術科（仮称）の二つの教科に分離し、情報・技術科においては、現在の「情報の技術」を中心として、情報技術に関わる内容の大幅な充実や他領域との関わりの強化を検討しています。そのようなことから今回は、まず現行学習指導要領の「情報の技術」におけるプログラミングについて研修を実施しました。富山市立大沢野中学校教諭の田中幹人氏からは、Scratch用拡張ボード「タコラッチ」を活用した計測・制御のプログラミングについて、富山大学教育学部附属中学校教諭の寺崎明則氏からは、「プログル技術」を活用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングについて発表していただきました。その後の意見交換では、発表内容を基に、プログラミングに関わる現状や課題についての意見交換が活発に行われました。

教育臨床研究部門

センター教授　石津　憲一郎

センター准教授　近藤　龍彰

教育臨床研究部門では、現在２名体制で部門運営を行っています。今年度も例年通り、富山県教育委員会との共同事業、各県内の教育センターから派遣される内地留学の先生の受け入れを行いました。Ｒ７年度は前期・後期合わせて９名の先生方が研修を行いました。研修のテーマとしては「子供と教師の適応に関するズレ」や「組織的な教育相談の実践」などがありましたが、いずれもこれまでの教育経験を振り返るとともに、現場に活用できる知見や視点を修得していったものと思われます。本事業の一部は教員カウンセラー（富山県カウンセリング指導員）育成事業の一環として行われており、現場への臨床心理的知識の普及に貢献しています。

昨年度オンラインにて実施された教育臨床部門研修会は、今年度は実施ができませんでした。現場の先生方が知りたい・聞きたいテーマや情報にキャッチアップし、実践と研究がつながれる場を定期的に開催したいと考えています。

小規模なものとしては、「教育臨床研究会」および「教育心理学勉強会」を開催しました。今年度は３回開催された「教育臨床研究会」では、過去の内地留学生と教職大学院の「学びの継続の一環」をテーマに、約25名程度の参加者の中で理論と実践の往還を続けています（今年度はすべてハイブリッド開催として行いました）。「教育心理学勉強会」では、現職の先生方と学生が10名程度集まり（Zoom等を活用）、教育心理学関連の知見について学び合いました。今年度は、安藤寿康（著）『教育は遺伝に勝てるか？』（2025年５月24日）、毛内紘（著）『「頭がいい」とはどういうことか―脳科学から考える』（2025年７月26日）、松下佳代（著）『測りすぎの時代の学習評価論』（2025年11月29日）、桑島隆二（著）『脇役になれない子どもたち － 不登校の正体－』（2026年２月28日）、といった書籍を取り上げて、参加者で議論しました。

今後も地域の教育現場に対して有益な情報発信を続けていきたいと思います。

教育工学研究部門

センター講師　小澤　郁美

教育工学部門では、「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適化学習」の実現に向けた活動を実施しています。2025年度は、①研究会の定例実施および公開講座、②学習支援事業、③地域貢献として、講演活動（教育者・児童生徒向け）および富山刑務所・福井刑務所での指導助言を行いました。

研究会では、現在の教育における諸問題の解決に向け、学校と大学との連携による教育実践と教育研究の融合を図った研究会（明日の学校を創る研究会）を定期的に行っています。本年度は、「次期指導要領の改訂」「イエナプラン」など様々なテーマのもと、参加者で討議を行いました。また、研究会の公開講座として「学校と大学のコラボレーション 教育フォーラム2025」を11月29日（土）に実施いたしました。

学習支援事業では、認知カウンセリング（認知心理学の知見を活かした個別学習指導）の技法や、ワーキングメモリ理論（一時的に情報を覚えながら処理することにかかわる記憶機能であり、学習と関連）を活かした個別学習支援を実施しています。本年度も昨年度に引き続き、地域の小学生数名を対象に保護者や学校と連携しながら国語や算数の学習改善を目指した個別学習支援を行いました。

地域貢献活動として、学校心理士や特別支援教育に携わる教育者向けに、ワーキングメモリが小さいお子さんの学校生活における特徴や支援についてお話しました。また、県内の公立中学校や本学の附属中学校では、教育心理学の知見を活かした効果的な勉強方法に関する学習法講座を実施し、公立中学校での講演の様子は地方紙にも取り上げられました。さらに、富山刑務所では窃盗防止プログラムに対して、福井刑務所では作業場や作業手順書の改善に対して、それぞれ指導助言を行っております。

今後もこれらの活動を継続し、地域の教育改善の一助となるよう努めてまいります。

環境教育部門

センター教授　高橋　満彦
研究協力員　増山　照夫

令和７年度は、教育学部共同教員養成課程も完成年度を迎え、落ち着きを見せるとともに課題も見えてくる一年であった。活動拠点とする自然観察実習センターは、栽培活動を中心に各種活動がつつがなく行えて安堵している。

学部の実習関係では、人間発達科学部の栽培技術実習は履修者が減ってしまったが、教育学部の実習は、生活科の授業は２年目を迎えた。生活科の授業では、春一番に寺町農場でジャガイモの栽培を行った後、学部中庭で学生が持ち寄った野菜を栽培したが、履修者も相当数おり、にぎやかに充実した授業となった。

幼稚園のサツマイモ栽培は、行事の見直しで検討はされたようだが、本年も盛況のうちに実施できた。今年も生活科の授業と連携して学生の参加があり、教育的に良い取組であったが、昨年同様予定の調整には課題がある。このほか、家庭科実習等の材料ともなる野菜類の栽培を実施した。

いずれにしても、施設は老朽化が目立ち、管理のための人的資源も外部委託であり、ボランティアの御奉仕にも頼っているが、いずれも予算が足りていないので、引き続き予算獲得が課題である。

研究活動は、令和４年度から科研費基盤研究B（「鳥獣保護管理の現代的課題に適応した人と場の制度再構築：全国の猟師達と考える処方箋」代表者高橋満彦）を実施しており、本年度も論文や学会発表を行った。昨今の熊問題などを踏まえ、鳥獣問題を扱う高橋の研究は、社会的注目も受けるようになった。例えば、11月には北海道平取町に招かれ、先住民族と鳥獣資源利用の法的側面をテーマに講演をするとともに、町が環境省に提出する意見書の起草を支援した。

このほか、９月にはUNEPとアジア開発銀行が東京で開催したモデル森林法典起草事業（MoFAI）のワークショップに招聘され、講演とコンサルティングを行った。また、農業土地改良に伴う生物多様性や女性参画の問題を論じた論考を、国際誌に掲載することができたことも特筆に値する。（Kameoka, K., Takahashi, M.A. (2026). Social and Ecological Sustainability of Land Improvement and Soil Use in the Japanese Agricultural Sector: Focusing on Gender Equality and Biodiversity. In: Ginzky, H., et al. International Yearbook of Soil Law and Policy 2025. International Yearbook of Soil Law and Policy, vol 2025. Springer, Cham.）

報　告

内地留学を振り返って

砺波市立出町中学校　中井　裕之

内地留学は、自分が「分かったつもり」になっていたことを見つめ直し、知識や技能を改めて学び直すことができた大変貴重な機会でした。これまでの実践と理論が結び付いていく楽しさを味わい、半年間とは思えないほど充実した学びの期間となりました。講義や外部研修、自己研究を通して、多様な子どもを理解するための視点や考え方、また、気持ちや思いに寄り添った支援の在り方について学べたことが、特に印象に残っています。さらに、指導教員や内地留学生、学生の皆さんとの議論や交流を通して、チームワークや相手を理解しようとする姿勢の重要性を改めて実感しました。これらの学びは、現場に戻ってから、自分が関わる人の困り感に寄り添う際に生かせるものだと感じています。ＩＣＴ活用や働き方改革が進み、教育現場は今後さらに変化していくことが予想されますが、「みんなが安心して挑戦し、学ぶことができる学校づくり」を目指し、学校心理学等についての理解をさらに深めながら、今後も研鑽を続けていきたいです。

高岡市立五位小学校　浅野　創也

内地留学を通して、教育相談や生徒指導に関する深い理解が得られたことは、私にとって大きな収穫でした。大学の授業では、子供たち一人ひとりの背景やニーズに応じた支援が不可欠であることを学び、個別対応の重要性を再確認しました。学外研修として、学びの多様化学校やフリースクール等を直接訪問し、子供たちの学びの場が「学校」だけではないということを実感しました。さらに、教育相談の実践例を通じて、具体的な問題解決の技術や手法を学ぶこともできました。特に、グループワークやロールプレイを用いたアプローチは、実際の教育現場で非常に有効であると感じました。同期の内地留学生や学生との関わりでも自分の見識を深めることができ、とても感謝しております。これらの経験は、現場に戻った際、教育者としての視野を広げるだけでなく、子供との関係をよりよいものにするための基盤となっていくと思います。学びを活かしながら、今後よりよい支援ができるよう努めていきます。

入善町立入善小学校　本村　翔平

内地留学の半年間は、これまでの教職経験をじっくりと見つめ直すことができる非常に大きな転機となりました。大学の講義を受けたり、ゼミで他校種・他地域の先生方や学生と議論したりする中で、新たな知識に触れたり、これまで気付かなかった視点をもったりすることができました。また、学外研修では、学びの多様化学校やフリースクール、少年院等を訪問し、様々な状況下で苦戦する子供たちへの支援の在り方について深く学ぶことができました。いつの間にか「こうあるべき」という狭く偏った考えにとらわれていた私にとって、ここでの経験はすべてが新鮮であり、毎日が新しい発見の連続でした。そして、内地留学中に出会った石津先生の「変えようとするな、分かろうとせよ」という言葉は、これからの教育実践を支える大切な指針となっています。ここで学んだことを胸に刻み、今後も真摯に子供たちと向き合っていきたいと思います。

報　告

第107回国立大学実践研究関連センター協議会報告

例年２回開催されている国立大学実践研究関連センター協議会について、本年度は９月末の開催が延期されたため、年１回の開催となった。第107回国立大学実践研究関連センター協議会は2026年３月17日（火）に、オンラインにて実施された。当センターからは近藤龍彰准教授（教育臨床研究部門）が参加し、各実践センターとの情報共有等を行った。

業 務 報 告

センター日誌　令和７年度の実践総合センターの主な行事

令和７年（2025）

６月５日～11日	第１回教育研究実践総合センター紀要編集委員会（メール会議）
６月24日	第１回教育研究実践総合センター運営会議
	第２回教育研究実践総合センター紀要編集委員会
９月11日	第３回教育研究実践総合センター紀要編集委員会
11月13日	第４回教育研究実践総合センター紀要編集委員会
11月29日	学校と大学のコラボレーション『教育フォーラム2025』

令和８年（2026）

３月17日	第107回国立大学実践研究関連センター協議会

編 集 後 記

今年度も、多くの方々のご協力により、センターニュースの46号をお届けできることとなりました。

人間発達科学部が教育学部に改組して４年が経ち、いよいよ教育学部としての最初の卒業生を送り出す年度となりました。多くの学生たちが未来の教育現場を担う存在として、その一歩を踏み出していきます。しかし、子どもや学校現場を取り巻く環境は厳しさを増しております。その中においては、センターと現場、研究と教育の連携も強く求められていくことと思います。学校現場に少しでも力になれるようなサポート、発信をしていくことは、センターの重要な役割です。今後もこの機能をさらに充実・発展させていきたいと思いますので、引き続きのご協力とご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

印　　刷　令和８年３月23日
発　　行　令和８年３月23日
編集発行　富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター
代表者　高橋　満彦
〒930-8555 富山市五福3190　☎076-445-6380